

「今日の説教、聴き手のために」 2009/1/25 明治学院教会(142)

(このプリントは毎週作っているものです)

岩井健作

「教会の成長」

コリ I 3:1-9

「しかし、成長させてくださるのは神です。」(6)

- 1、教会堂を「天と地をつなぐ空間」といった教会建築家があります。それになぞらえれば、教会の働きは「天と地をつなぐ営み」です。「天」は聖書では、限り無く超越であり、「地」は、限り無く闇です。戦争、飢餓、貧困、抑圧の現実。教会はその間にあって、執り成し、苦しみ、祈り、それでもなお「神」を讃美し、感謝する役目に召された者の集いです。
- 2、パウロのコリントの手紙は、教会の形成のために払われた、パウロの涙と汗の結晶です。彼は1年6か月の間、この町で伝道をしました。その活動がいかにも激しいものであったかの記録です。コリントの街はギリシャの大都会、港町。60万の人口のうち、20万は自由な市民、40万は奴隷でした。港街は開放的・闊達ですが、派手で、お金の世界、宗教も自分達の安全とご利益のためにあり、売春などは当たり前で、知的にも、人間中心な哲学が根を張っていました。弱肉強食の社会でした。
- 3、パウロの苦勞は、弱者を抱え込んだ人間関係の質の問題でした。「一つ部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶ」(I 12:12)。この「人間の繋がり方」の問題です。社会的底辺層の人達が先ず、これを(福音)を受け入れました。「神は世の無きに等しい者、身分の卑しい者や、見下げられている者を選ばれたのです。」(I 1:26f)。コリントの教会は、無力なものが、ただ恵みを信じて助け合う人と人とのつながりを証しすることで「天」と「地」をつなぐ営みに参加できた教会です。だが、少し時が経ってみると、宗教的世俗の濁流に呑まれました。
- 4、「霊の人」と称する、当時、グノーシス(知識)主義思想の人々が教会の中で「霊的」と称して「強い人」として派閥を構成して振る舞いました。世俗の宗教版です。「お互いにねたみや争いがたえない」(3)が現状です。
- 5、問題は、ある「概念」に生きることでなく、自分の殻を破ることです。神は神であることを破って、僕の姿で、人と成りたもうた、のがイエスの十字架の死を通して示された福音です。神が、僕の姿を取られたように、殻を破るところに、成長があります。その意味で成長させて下さるのは神なのです。「神の」という言葉の中に、あのイエスの十字架の出来事が含まれています。たえず、十字架を負って、とは自分の殻を破ることです。成長とは、あの十字架の自己否定を、自己放棄を、どれだけ繰り返して深めることが出来るか、なのです。
- 6、自分の「殻」を破るという人生を歩んできた方に出会うとほんとうに信仰の成長を教えられます。聖書の言葉でいえば「キリストと一体になってその死の姿にあやかかる」(ローマ6:5)ことでしょうか。そんな方たちによって教会は成長を遂げてきました。